

初修外国語教育と実践例——北海道大学の中国語教育を事例に——

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院特任教授 ヤン サイホン 楊 彩虹

1. はじめに

日本の中国語教育は近年著しく発展しており、大学の初修外国語、つまり第二外国語の学習者数は全ての言語の中で最も多いとされている。北海道大学における第二外国語としての中国語教育は歴史が古く、履修者人数も最も多い。本報告では、まず北海道大学の初修中国語教育のカリキュラム、科目構成、使用教材、eラーニング、評価方法などについて紹介し、その課題について指摘する。また、報告者の会話授業における取組についても紹介する。

2. 先行研究

郭春貴（2020）では、日本の第二外国語としての中国語教育について以下の問題点を指摘している。大学の教育環境の問題：1.研究を重視するが、教育を軽視する。2.文学、文化を重視するが、語学を軽視する。3.学生が二つの外国語を履修する。中国語教員の問題：1.専任教員が少ない。2.専任中国人教員が少ない。3.中国語専門の教員が少ない。4.教員の教育に対する意識が低い。学生の問題：1. 第二外国語の中国語学習者数は不明。2.学習動機：①中国に興味を持っている。②高校の先生や友達の影響。③漢字を使うため単位が取りやすいと思ったから。3.学習スタイルの特徴：①「読む」「書く」ことは得意だが、「聞く」「話す」ことは苦手。②授業では積極的に発言しない。③学習態度はまじめ。教育目標：1.教育目標が不明確。2.共通の教育ガイドラインがない。教材：1.内容がさまざまであり、教材の質もまちまちである。2.初級の教材が多く、中級以上の教材が少ない。3.中国で出版された教材は日本の初修外国語の授業に合わない。授業形式：1.1クラスの人数が多い。2.多くの大学は週2コマ、1年間中国語を学習する。3.会話の練習ができない。さらに、以下の改善策を提案した。1.時代に合う共通の教育目標の設定。2.言語教育を専門とする教員の採用。3.教員資格の確立。4.教育を重視する環境の整備。5.中国の支援と協力。

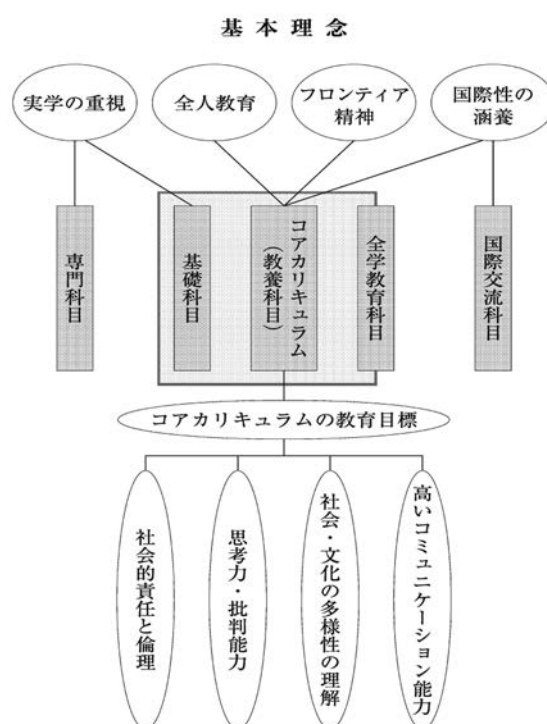
また郭春貴（2024）は、日本の大学の第二外国語の中国語学習者は全言語で最も多く、毎年20万人に達しているが、社会や大学は中国語を重要視していないと指摘している。具体的には、6割以上の授業は非常勤講師が担当しており、選択必修から選択科目への変更や単位削減などの理由から専任教員と非常勤教員を採用しなくなる大学が増えるといった点を挙げている。氏は、中国語教師は専門知識を身に付け授業の質を改善する必要があるとし、中国語教育学会は研修プログラムの提供、教学アウトラインの作成、教授法の本の編集、教師へのサポートができると提案している。

3. 北海道大学の初修外国語としての中国語教育の紹介

北海道大学では外国語教育科目として英語の他に初修外国語の中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語等も履修できるが、中国語の受講者数がもっとも多い。履修者は一年生であるが、大部分は初修外国語の中国語学習者である。新入生は入学後に第二外国語を選択して履修するが、各言語のクラスが定員を超えた場合は抽選で履修の可否が決まる。中国語の授業には選択必修科目と選択科目がある。前者は中国語Ⅰ、Ⅱで週2回の授業、後者は中国語演習で週1回の授業となる。多くの学生は週に3時間の中国語の授業を受けている。

3.1 学習目標

図1 基本理念



北海道大学学務部教育推進課（2024：3）

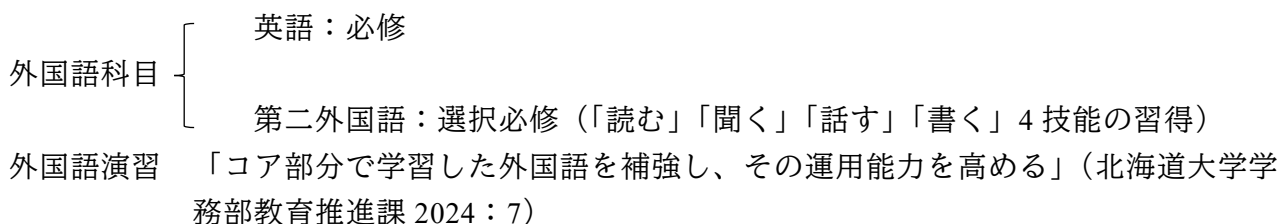
外国語科目、外国語演習科目の目標：

札幌農学校の「国際性の涵養」の伝統を生かす科目である。

学生の将来の学術研究に資する。

さまざまな社会や文化の様相を理解する。

図2 外国語の科目構成



3.2 選択必修科目

中国語Ⅰ、中国語Ⅱ（週２回、各２単位）

中国語Ⅰの到達目標

発音、基本的な会話表現、基本的な文法事項を習得する。「中国語検定試験」（日本中国語検定協会実施）の「準４級」レベル到達を目標とする。

中国語Ⅰは週２回の授業を２人の教員がペアで担当しており、メールで授業の進捗状況などについて連絡を取り合っている。すべての中国語Ⅰの授業は同一のシラバス、評価基準（小テスト、Glexa 練習問題、単元テスト、統一試験）であり、学期末に統一試験を行う。

試験回数が多いため教員と学生の負担が大きい、テストを行うことで、学生は学習した内容を復習することができる。また、中国語Ⅰ、Ⅱで学習した語彙や文法などの基礎が身につくことから、演習授業での応用が可能となる。

表１ 中国語Ⅰ授業の流れ

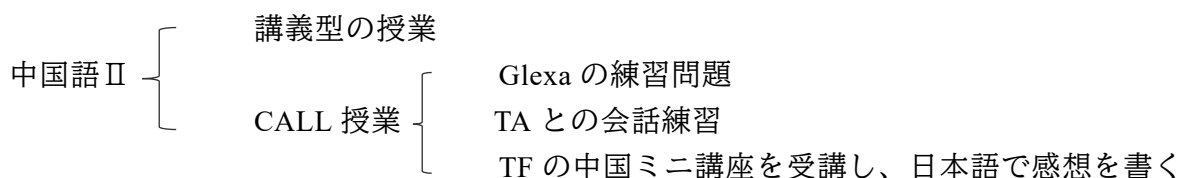
予習	単語の意味を調べる。
授業	本文を読む。 新出単語の学習。（リピート。指名した学生に単語を読んでもらい、意味を説明してもらう。日本語の漢字と異なるもの、形声文字を中心に説明する） 文法の学習。文法の規則を分かりやすく説明して例文を学習し、イラストを見て文を作らせる。 本文とミニダイアログを学習する。 練習問題をする。
宿題	Glexa の練習問題をする。

中国語Ⅱの到達目標

自然な発音、基本表現とその応用、文法事項、基礎的なコミュニケーション能力を習得する。「中国語検定試験」（日本中国語検定協会実施）の「４級」レベル到達を目標とする。

中国語Ⅱも週２回であるが、１回は講義型の授業、１回はCALL 授業を行う。

図３ 中国語Ⅱの授業内容



3.3 学生人数の問題

中国語Ⅰ、Ⅱは１クラス５０名以上の規模であることから、会話練習や発音の訂正が難しい。授業中、授業外における教員の負担が大きい。

対策：学生に繰り返しリピート練習することの重要性を説明し、発音の間違いをその場で訂正する。

会話練習をさせた後に、何組かに発表してもらう。

3.4 教材の紹介

北海道大学の中国語Ⅰ・Ⅱは北海道大学中国語教科書編纂グループが作成した『北大総合中国語Ⅰ・Ⅱ』（2022、朝日出版社）を使用している。この教材は全28課で構成されており、中国語初級段階の文法項目をカバーしている。中国語Ⅰの学習範囲は第1課～第16課であり、556の単語を収録しており、1課の平均語彙数は35個である。そのうち、語彙数が最も多いのは第1課の49個である。中国語Ⅱの学習範囲は第17課～第28課であり、401の語彙を収録している。第28課の語彙数は18個と最も少ない。このように、語彙量が多く、学生が事前学習として単語を調べる負担も大きい。また、語彙分布のバランスが悪く、既習の語彙を繰り返す率が低い。報告者は語彙表の一部を表2の虫食いのようにすることを提案する。それにより、中国語の簡体字と読み方に気を付けてほしいところ、日本語の意味が簡単に推測できない語彙について学生に調べさせることができる。

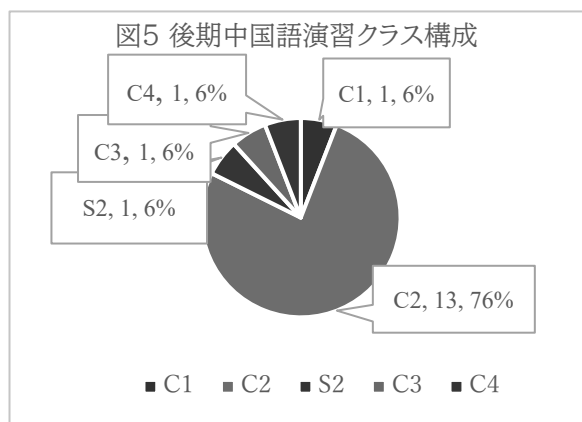
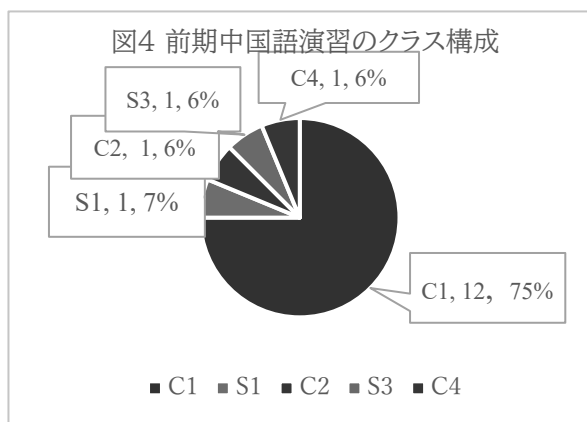
表2 語彙表

	Dōngjīng	東京
练习		練習する
酸奶	suānnǎi	

この教材の良い点は、文法シラバスであるため、簡単な文法項目から難しい項目への組み立てができており文法学習に適している点である。本文と練習問題は北海道や北海道大学のことを取り上げている。問題点は、学習内容が多く、本文の会話が少なく、内容が面白さに欠ける点である。また、中国語Ⅱの文法は難しく、1回の授業で1課を学習することになっているが、内容が多く時間的に余裕がない。

3.5 選択科目

中国語演習は選択科目で、週に1回の授業である。1クラスの定員が25名であるが、中国語演習1、2は履修者が多いため、一部のクラスは30名に増員した。担当教員が各自で教材を選定し、評価を行う。授業は会話、ライティング、文法、読解、観光、中国文化など多彩な内容となっている。



C：コミュニケーション（実用）

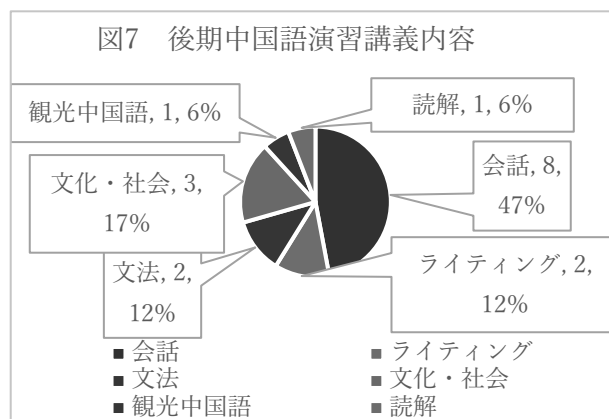
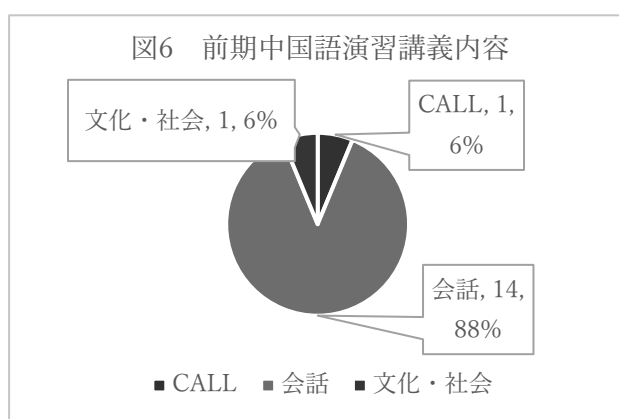
S：セミナー（教養）

前期の授業は「中国語演習 1」、後期の授業は「中国語演習 2」を中心としており、それぞれ授業全体の 82% 占めている。中国語演習の多くは初級であり、クラス数が多いが、履修者は多く、定員を超えた場合抽選で受講を決めている。一方、中級クラス中国語演習 3、4 は前期と後期それぞれ 1 クラスのみであり、履修者数も少ない。

このような状況になる原因は以下の点であると考えられる。

1. 一部の文学部の学生を除き、二年次に中国語演習を履修しても卒業単位にならない。
2. 高等教育機構はほかの学部の教室から離れており、高等教育機構で授業を受ける 2 年生以上の学生が少ない。
3. 一部の 2 年生以上の学生、既修者、中国にツールを持つ学生も初級の演習授業を履修している。

改善策：シラバスやガイダンスで自分のレベルに合う演習授業を受講するように促す。



前期の演習授業は会話授業が 88% を占めている。後期は会話が一番多く、47% 占めているが、それ以外にもライティング、文法、中国の文化・社会、観光中国語、読解の授業があり、多彩な内容となっている。また、それぞれの教員が自身の専門を生かした授業を行っている。例えば、報告者はライティングと会話テストの評価を研究しているが、専門である会話とライティングの授業を担当している。また、ほかにもメディア専門の教員は中国社会の授業、観光通訳ガイド経験がある教員は観光中国語の授業、中国の絵本を研究している教員は中国の絵本を読む授業を行っている。

3.6 中国語演習の会話授業における報告者の取組の紹介

①授業前半では、学習項目を分かりやすく伝えた後、リピートやドリルでパターン練習を行う。後半では学生中心のロール・プレイやタスクを実施し、口頭練習を多くする。

直接法で導入する

直接法を用い、物やイラストを見せて語彙や文型を導入している。

図8 教材の練習例

	A	B
1	你是哪个大学的(学生)? Nǐ shì nǎigè dàxué de (xuésheng)?	我是_____大学的(学生)。 Wǒ shì _____ dàxué de (xuésheng).
2	你是哪个系的(学生)? Nǐ shì nǎigè xì de (xuésheng)?	我是_____。 Wǒ shì _____。
3	你的专业是什么? Nǐ de zhuānyè shì shénme?	我的专业是_____。 Wǒ de zhuānyè shì _____。
4	你要哪个? Nǐ yào nǎigè?	我要_____。 Wǒ yào _____。
5	(モノを指差して) 这是谁的? Zhè shì shéi de?	_____。 _____。
6	你买什么? Nǐ mǎi shénme?	_____。 _____。

身の回りのもの		

沈国威監修、氷野善寛、小嶋美由紀、海曉芳ほか（2022：38、39）

図8の右のイラストまたは身の回りの物を使い、左の図の会話練習をさせる。

図9 教材の練習例

① 今、何時でしょう？時計を見て下に時刻を書きなさい。また、二人で会話してみましょう。④D 42

_____	_____	_____	_____
A: 现在几点了? Xiànzài jǐ diǎn le?	B: 现在 () 了。 Xiànzài _____ le.		

余瀾、中桐典子（2019：24）ペアでの会話練習のあと、ワークシートに自分のスケジュールを記入させ、それに基づいて二人で約束の時間を決めてもらう、などの練習を行う。

分かりやすく文法を説明する。

(1) 桌子上 有 一本书。(机の上に本がある。)

場所 有 人・もの
不特定
新しい情報

(2) 那本书 在 桌子上。(あの本は机の上にある。)

人・もの 在 場所
特定

新しい情報

(3) 我在穿大衣。

(私はコートを着ている。)

(4) 我穿着大衣。

(私はコートを着ている。)

“在”と“着”はいずれも日本語では「ている」で表すが、中国語では使い分ける必要がある。“在”は動作の進行を表すため、実際にコートに袖を通しながら(3)の文を導入する。“着”は状態の持続を表すため、コートを着た状態で(4)の文を導入する。このように、学習者に両者の違いが分かるように説明している。

ゲームを取り入れる。

普段の授業にたくさんの教室活動を取り入れ、アクティブな授業を実施している。例えば、ピンインを教えた後に、ピンインを書いたカードを引かせ、それを読んでもらう。また、クイズやゲームを通して楽しく学べるような工夫も行う。例えば、数字を学習する際には、ボールを投げてキャッチした人が次の数字を言うゲームやビンゴゲームなど、動詞文を学習する際には、一人がジェスチャーをして、皆がその動作を中国語で言い当てるゲームなどを取り入れ、言語の機能に着目しながら楽しんで学習することができる授業の実践を心がけている。

中国語演習 2、4 の初回の授業で、グループで自己紹介をさせているが、交流する相手が限られており、中国語で簡単なことを言ったあとはすぐに日本語での会話になるため、表 3 を用いて会話練習をさせた。これは、既習のさまざまな文型、語彙を取り入れて作成したものである。新出語彙を調べて、空欄に聞きたいことを記入させてから会話練習をした。該当する回答を得たら○印を付けて、次の人に質問する。ビンゴになったら教員に報告するというビンゴゲームの形を取った。その結果、たいへん活発な中国語での交流活動となった。

表 3 会話練習のビンゴゲーム

最近カラオケに行った	音楽を聞きながら勉強する		イヤホンをなくしたことがある	来年卒業する
	野球の試合を見たことがある	滑らない靴を持っている	卓球ができる	姉がいる
札幌テレビ塔に上ったことがある		中華料理が好き	週末バイトをする	ネットで買い物をする
サンプーチャンを知っている	中国語の辞書を持っている	卒業後大学院に行く	餃子を作れる	
韓国に行ったことがある	中国の歌が歌える	中国のドラマを見たことがある		よく図書館に行く

伝言ゲーム

(5)听说汉语考试很难。(中国語のテストは難しいそうです。)

(6)听说下星期五不上课。(来週金曜日授業がないようです。)

(7)听说明天下雨。(明日は雨が降るそうです。)

“听说”を教えるとき、伝言ゲームをした。

主述述語文“ 她头发很长 。”（彼女は髪の毛が長い。）を教える際に、4人グループを作り、3人が順番に中国語の文を言い、1人はそれを聞いて絵を描く活動を行った。例えば、絵を描く学生は文を作る3人の“它腿很短。”（その動物は足が短い。）“它眼睛很大。”（その動物は目が大きい。）“它鼻子很小。”（その動物は鼻が小さい。）という発話をもとに、その描写にあった動物を描くというものである。

“把”構文を教える際によく用いられるのが「誰かに何かをさせる」ことである。例えば、“请把窗户打开。”（窓を開けてください。）のような指示文の練習が多い。しかし報告者は、日本人学生はこのような練習が得意でないと感じたため、次のような「アハ体験」を実践した。

学生に目を閉じるように指示したあと、教員がドアを開けたり電気を消すなどして環境を変えるほか、教員自身が眼鏡をかけたりコートを着るなどして見た目に変化を加えたあと、目を開けた学生に気付いた変化を“把”構文で表現させた。

②CALL 教材を作成し、学生に公開する。具体的には、作文授業のオンデマンド教材を作成したほか、複数の授業の Glexa で練習問題を作成し、授業外の課題とした。また、自習用に教科書の本文を Ondoku Chinese に載せた。

③中国語や中国文化により興味を持たせようと、中国の最新事情や学習に役立つサイト、アプリ等を紹介する。また、中国語の歌や映画の1シーンを教材に使い、セリフの表現を学んだり、中国語で演劇したりして、様々な活動を授業に取り入れる。また、趣味として古箏演奏と中国舞踊を長く続けており、これまで度々授業でも披露してきた。

④会話テストを導入し、ループリックを用いて評価することにより、学習目標がより明確となり、学生のモチベーションも上がり、積極的に会話練習に取り組むようになった。

⑤2020 年から日中大学生間のオンライン交流活動を実施する。「中国の学生と交流できて良かった」「中国と中国語への理解が深まった」などといった受講生の声が多く寄せられ、非常に好評である。中国側は、中国各地の十数校の大学に在籍中の日本語学科の学生数百名が交流活動に参加しているが、活動を通して中国国内での勤務校の知名度をあげることができ、実際に参加者のうち数名の学生が北海道大学の大学院を受験している。

これまで紹介した報告者の中国語の授業での取り組みにより、学生から「分かりやすい」「楽しかった」「会話が早い」といった声が多く上がり、学生アンケート結果で上位となり、北海道大学で3度エクセレント・ティーチャーズに選出された。2023 年度、数百ある外国語演習科目でトップとなり、ベストエクセレント・ティーチャーズに選出された。

前年度において、全学教育科目に係る授業アンケートを実施し、エクセレント・ティーチャーズに選出された者のうち、授業科目区分毎に総合評価の値が上位だったため、教育研究総長表彰（教育）を受賞した。

郭春貴（2020）が指摘しているように、日本の大学は研究を重視し教育を軽視する傾向がある。このような賞を設けることで、教育面で成果を出した教員を評価することにつながり、研

究だけでなく、教育も重視する環境作りができると考える。

4. 終わりに

本報告では先行研究を踏まえて、北海道大学の初修外国語としての中国語教育の教育目標、シラバス、教材、授業の進め方、評価方法などを紹介し、問題点を指摘して解決策を提案した。さらに、報告者が中国語演習授業で行った教育実践例を報告した。

参考文献

郭春貴（2020）『第2外国語中国語教育の諸問題』白帝社

郭春貴（2024）日本の大学汉语教育何去何从？--大学二外汉语教育--『日本語教育』（22） pp. 15-34

沈国威監修、氷野善寛、小嶋美由紀、海曉芳ほか（2022）『ライト版 中国語でコミュニケーション』朝日出版社

日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会 2002『日本の中国語教育—その現状と問題・2002』日本中国語学会

北海道大学学務部教育推進課（2024）『令和6年度北海道大学全学教育科目実施の手引き』北海道大学学務部

北海道大学中国語教科書編纂グループ（2021）『北大総合中国語I・II』朝日出版社

楊彩虹（2020）「中国語会話テスト評価の実践研究—ループリックによる試み—」『中国語教育』（18） pp. 89-108

余瀾、中桐典子（2019）『あなたが主役演じる入門中国語』朝日出版社

中国語初級段階学習指導ガイドライン: <https://www.jacle.org/storage/guideline.pdf>

Ondoku Chinese: <https://www.ondoku.org/>

付録：楊彩虹氏講演会・質疑応答の内容

小林（教養教育センター長）：楊先生、興味深いご講演ありがとうございました。北海道大学の初修外国語のカリキュラムを中心にお話をいただき、むろん、カリキュラムのみならず教材の開発、あるいは教授法というお話もいただきましたので、中国語の先生方も非常に参考になったのではないかなと考えております。参加されている先生方から何か質疑応答の時間を設けたいと思いますので、質問のある方は、挙手ボタンを押していただければと思います。よろしくお願いします。中国語の非常勤の先生方もおられると思いますので、ぜひ気配りなく何か質問等あったらよろしくお願いいたします。

会場発言：楊先生、ご講演ありがとうございました。非常に勉強になりました。一点、確認したいのですが、中国語演習を担当する先生たちは、非常勤じゃなくて、大学の常勤の先生ですか？

楊：常勤と非常勤どちらも教えています。

会場発言：わりと自由に自分の得意なところを発揮して、授業を進めていくことができるということですね。

楊：自分の専門と関係なく中国語の授業している先生もいれば、多少自分の専門を活かす授業している先生もいます。例えば、私は特任で会話とライティングを担当していますが、会話、文法の授業を担当するのは専任の先生です。中国語会話、読解を担当しているのが非常勤の先生です。

会場発言：ありがとうございました。あともう一点、鳥取大学では一所懸命に学生を集めて海外語学研修に送りますが、北海道大学も、そういう取り組みはありますか？

楊：恥ずかしいですが、学生があまり集まらないです。興味ある学生は、自分で言語教育センターに行き、調べるということになります。

会場発言：そうですか。もちろん、オンライン交流も、ものすごくいい効果が出るのではないかと思います。

小林：崎原先生、ありがとうございました。他の方がお手を挙げておられますので、よろしくお願い致します。

会場発言：楊先生、本日は大変参考になるお話ありがとうございました。お聞きしたいのですが、初修外国語は、本学では昔は4単位だったのですけれども、農学部、工学部が2011年ぐらいから2単位にしてしましまして、必修単位として地域学部だけが今4単位です。例えば、初修外国語の必修単位をこの4コマから2コマに減らしてしまうことの弊害について、お考えをお聞きできればありがたいです。

楊：そうですね。私は語学の教員として、やはり4単位にした方がいいじゃないかなと思います。北海道大学も今は学部関係なく、理系も文系も4単位になっていますが、これからどうなるかは、まだ分らないです。郭春貴先生の調査によると、全国的に見ると、必修科目から、選択科目に移行する大学も現れているようです。

小林：和田先生、ありがとうございました。せっかくの機会ですので、非常勤の先生も含めて、何かご質問等あればと思いますが、いかがでしょうか？よろしくお願い致します。

会場発言：鳥取大学でスペイン語を担当しております箕輪と申しますが、興味深いお話ありがとうございました。お話の中で、一つ、お教えいただきたいのですけれども、今北海道大学では、中国語だけなのか、それとも、他の初修外国語すべてなのか、評価基準として、テストとか、そういったものはもうすべて共通で行われているということですが、これは、いつ頃から導入されていたのかを、ちょっと気になりました。また、例えば、もともとバラバラで各教員が、自分の基準で評価をしたり、テストをやっていたりしたのを、統一するそのプロセスですが、どういう形で統一をなさっていったのかということと、全国的に見て、その評価基準、自由度や内容とかのばらつき、特に学生の場合、評価が非常に気になることだと思うのですが、それを統一するというのは、非常に重要なことなのかなというふうに考えております。もし、統一するプロセスに、ご参加されていたのであれば、その過程で気づかれたこと、ちょっと難しかったことが、もしあれば、伺わせていただければと思います。よろしくお願いします。

楊：私が今年で北海道大学に着任して7年目になります。私が来る前、だいぶ前から統一試験行われているそうです。第二外国語の統一試験日を大学が決めており、おそらく、ほかの第二外国語の授業も統一試験が行われていると思います。具体的なことは聞いていないですが、お

そらく、「中国語Ⅰ・Ⅱ」は、学生の GPA においてとても重要な科目なので、統一試験を行っていると考えられます。また、11 段階評価にしないといけません。そして、A+も 5% 以内に収めないといけないというの也有ります。それぞれ重要な授業なので、おっしゃったように、学生も評価を気にしていると思います。統一試験によって学生は本当に一所懸命に勉強しています。普段の単元テストとか、小テストも、ほとんどの学生が一生懸命勉強しています。そのため、学生の負担は本当に大きいです。

会場発言：そうしますと、もう一つ、ちょっとついでに今お話の中で出てきたことについて伺いたいのですけれども、例えば、それぞれの人が、A+とか、B+とか、Bとか、いろいろあるかと思いますが、それもおおよそ、やっぱり大学の初修外国語のその部門か何かで、そのパーセントやパーセンテージというものを、もう数値化されて、決められているという形なのではないでしょうか？

楊：A+だけ 5% 以内に、他は、偏りのないようにという風になっています。

会場発言：どうもありがとうございました。

小林：箕輪先生、ありがとうございました。実は私も同じような質問をお聞きしたいなと思っていました。本学でも中国語は、専任の先生とその他に非常に熱心な非常勤の先生方がおられます。先日、その皆さんに一度、お集まりいただき、今後、可能であれば、教材をできるだけ標準化して統一化して行って、成績の付け方なんかも、統一的な基準を持っていこうのではないかと、という最初の打ち合わせをしました。特に非常勤の先生方、みなさんの熱心な先生方だったので、今後うまくいけばいいなというふうに期待をしているわけですが、何か先生の方から、そういった統一基準における評価方法や、統一試験の実施にこれからこう進めていく我々の組織に対して、何か一言アドバイスというか、こういうことに気をつけたほうがいいというか、こういうことをぜひやっていただろううまくいくじゃないかというようなことが、もしありましたら、何か一言アドバイスいただければと思います。いかがでしょうか？

楊：普段の授業、そして、今回きちんと演習授業を調査してきました。まず「中国語Ⅰ・Ⅱ」でシラバスの統一、教材の統一、評価の統一をした上で、演習授業でさらに個性を生かす部分もあるので、このバランスは良かったと私は感じております。

小林：なるほど。そうすると、もちろんその統一的な基準を重視する一方で、各先生方の特性ということも生かしながら、バランスよく進めていくということですね。

楊：はい。そうです。統一することによって、いい部分もありますけど、窮屈な部分も、どうしても出てしまいます。

小林：確かにそうですね。他の先生方からいかがでしょうか？何か最後によろしいですか？

会場発言：特に質問ではなく、情報共有ですけれども、鳥取大学では、初修外国語の授業は週 1 回だけで、前期 1 単位、後期 1 単位で、年間 2 単位です。もうとても寂しいです。そういうのが今の状態です。

小林：週 1 回だと、どうしてもなかなか学習内容の定着が非常に難しいです。

楊：そうですね。

小林：特に初修外国に関しては、こういう状況はあるのかなというふうに思っています。最後にももしよろしければ、楊先生が外国語科目の「中国語Ⅰ・Ⅱ」のクラスについてお話しされて

いたときに、履修者は1年生がほとんどだと、おっしゃっていましたが、鳥取大学は週1コマとなり、1年生が前期に1コマ、後期に1コマで、2年生に関しては、学部によりますが、必ず取らなければいけない学部もあれば、そうじゃない学部、つまり、選択という形で希望者が履修するという感じになっていますが、北海道大学の場合は、1年生が「必修」というか、「選択必修」という言葉の違いがありますが、外国語は必修だと思いますけど、2年生はどんな感じになっているのでしょうか？

楊：ほとんどいないです。

小林：つまり、2年生は必修から外されているっていう理解でよろしいですね。

楊：そうです。「中国語Ⅰ・Ⅱ」は、1年生だけです。中国語演習科目は、学部によって、科目の単位数が違いますが、一つだけ取ればいい学部もあれば、二つ取る学部もあります。

小林：つまり、外国語科目として、2年生は必修ではないのですが、演習科目の方が、例えば、文学部の学生さんとかは、それは必修になっていたりするっていうことですね。

楊：演習科目は文学部の学生にとっても選択科目ですが、卒業単位になる学科もあります。

小林：そういうシステムですね。

楊：はい、そうです。演習科目の授業を取る2年生は少ないです。再履修者とか、または1年生の時抽選から外れた学生、どうしても中国語をやりたい学生がいたりします。また、卒業単位にならないけど、中国語に興味があって、あるいは語学に興味があって、いろんな言語を取る学生もいます。

小林：なるほど。中国語演習や外国語演習というのは、その担当の先生方の特性や専門的な知識を踏まえた別の展開があるということですね。

楊：はい、そうです。言語もものすごく豊富で、普段あまり聞かない言語に関する演習授業もあったりします。すごく面白いです。

小林：アイヌ語とかですか？

楊：そうです。

小林：なるほど。ありがとうございました。最後になりますが、もう一度、他の先生方から何かご意見とかご質問は、ありますのでしょうか？それでは、楊先生、本日は興味深いご講演大変ありがとうございました。今後引き続きいろいろご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いしたいと思います。ありがとうございました。

【付記】本講演は2024年11月29日（金）16：30-18：00にMicrosoft Teamsを使用したオンライン方式で実施された。

（編集：教養教育センター教授 崎原麗霞）